

沈黙の言語

— トニ・モリスンの『ラヴ』の語り

三井美穂

Language of Silence:

L's Narrative in Toni Morrison's *Love*

Miho MITSUI

要 旨

トニ・モリスンの『ラヴ』(*Love* 2003)の語り手は素性を明らかにしないまま語り始め、意図的に時系列を混乱させ、何かを隠し、読者を弄んでいるように見えるのだが、本稿ではこのような語り手を設定した意図と語りの謎に焦点を当てて論じる。語り手Lは沈黙とハミングでその存在感を訴えるが、Lの沈黙にはどのような意味があるのか、また何を隠しているのかを探る。沈黙はモリスンが「ノーベル賞受賞記念講演」で描いた賢者の特質であり、白人家庭を支えてきたマミーの特質でもある。沈黙はまたアフロ・アメリカンの文化に根差したもので、奴隷制時代にまでさかのぼって考察する必要がある。小説の舞台となるホテルは一種のプランテーションで、登場人物はその奴隷になぞらえられる。抑圧された者たちの沈黙は、明確な定義を拒否した「知恵と抵抗のサイン」としての言語と言える。

キーワード：トニ・モリスン、『ラヴ』、賢者、マミー、沈黙

はじめに

『ラヴ』(*Love* 2003)は『パラダイス』(*Paradise* 1998)に続き、トニ・モリスンの後期の小説独特の、意図的に時系列を混乱させる語りが全編を支配する小説で、いつ何が起こったのかを把握するのが非常に難しい。『パラダイス』では、読者は「最初に殺された白人の女は誰か」というミステリーを解決しようとして読み進めたが、語り手は少しもヒントをくれなかった。モリスンが登場人物の肌の色を隠したからである。同様に『ラヴ』でも「誰がコーギーを殺したか」は最後の最後に曖昧な言葉で告白される。ミステリーは別としても、モリスンの語り手は伏線を張り巡らし、あるいは経緯を後回しにして結果を先行させ、時系列を台無しにして、読者が最後まで読み終えたところでようやく全体像がおぼろげに理解できるようにしかけている。読者はそこに「何か隠

されている」と思わずにはいられない。語り手はなぜ読者をこのように弄ぶのか。

『ラヴ』のストーリー自体ははっきりしている。52歳の黒人ホテル王ビル・コージーが12歳の孫娘クリスティンの親友ヒードを再婚相手に選んだことで、幼い二人の友情に修復できないほどの亀裂が入る。のちにコージーは謎の死を遂げるが、残された不可解な遺言書をめぐって遺産争いをするこの2人の女は、60代半ばの現在まで憎みあいながらも一つ屋根の下で暮らしている、というのが小説の大筋だ。小説の現在は1990年代半ばでコージー家が舞台である。クリスティンとヒードのほか、かつてコージーのホテルで働いていたサンドラーとヴィーダ夫妻、そのふたりの孫でコージー家の雑用をしているローメンの5人が主な登場人物だが、そこへヒードの求人広告を見てやってきたジュニアが加わるところで小説の幕が上がり、クリスティンとヒードの和解で幕が下りる。この6人が3人称の語り手を通じて自由気ままに回想し、意識の流れに任せてエピソードを取り出す。それをつなぎ合わせることで、読者は彼らの過去を再構築していく。物語が進む、というよりも、過去を掘り起こして展開する、と言ったほうが妥当な小説である。

時系列を無視したこの3人称の語り手に交じって、時折もうひとりの語り手が登場する。イタリック体で書かれた部分のこの語り手は全編の語り手にもまして読者に非協力的だ。曖昧な描写、逸脱、省略、沈黙、ハミングなどが頻繁に現れるため、通常の語り手らしい語り方を拒否しているように見える。まず小説冒頭の章分けのない数ページで、このイタリック体の語り手は不埒な女たちの話を始め、とりとめない連想を続けてようやく物語の舞台となるホテルの描写にたどり着く。登場人物の名前はコージー、メイ、ヴィーダ、サンドラーの子が言及されるが、物語での彼らの立ち位置は不明のまま。逆に物語の中心となるクリスティン、ヒード、ジュニアは名前を与えられないまま、人物像が部分的に描かれる。ホテルの盛衰、その周辺地域の災害とその後の開発、コージーの女たちのもとに下着をつけていない娘がやってきたことなど、舞台設定が不完全に紹介される。この冒頭の語りの中で、語り手はどうやらホテルで料理を作っていたことが示唆されるが、第2章のヴィーダの回想でようやくLという名の料理人がホテルにいたことがわかる。第3章の終わりでイタリック体の語り手が再び登場し、自身の生い立ちからコージーとの出会い、Lと呼ばれていることなどを語る。ここでようやく語り手の素性がわかるのだ。さらに小説の最終章第9章で、Lはすでに鬼籍に入っていたことが明らかになり、読者は幽霊の語りを聞かされていたことに驚く。本稿ではこのLの語りについて考えていきたい。

全編にわたる3人称の語り手とは別に、なぜLの語りが必要だったのだろうか。もちろんLは1990年代の現在には存在しないため、全編の語り手はその心情を代弁することはできない。同様のことがコージーにも言えるわけだが、コージーの語りはない。

コージーには語らせず、Lにはどうしても語らせなければならない理由があったはずだ。にもかかわらず、Lの語りは本編の語り手が語ったことをむしろ抽象的に描くにとどまる、あるいは逆説的に何かを隠すために語っているように見えるのだが、それはなぜなのか。Lは最初に名乗ることもない。抽象的でストーリーにもならずエピソードとしても不完全なものを、素性も明らかでない、信頼することもできない語り手が、なぜ読者を混乱させるために語るのか。

このLの語りの謎を解明するにあたり、まずモリスンのエッセイ「ノーベル賞受賞記念講演」(“Nobel Lecture 1993”以下「記念講演」)をよりどころとして分析したい。Wallaceはこの2つの作品を並べて倫理的批評理論から論じている(Wallace 375-376)が、本稿ではコミュニティの中で「知恵を備えていると思われていた」(『ラヴ』3)賢者としてLを捉える。次に賢者の語りとはどのようなものか、Lの語りを具体的に論じる。最後に、歴史的に常に脇役で語り手の役割どころかセリフも与えられてこなかったマミーとしてLを捉え、賢者の語りと重ね合わせてみたい。

I. 賢者の語り

「記念講演」にはアフロ・アメリカンのコミュニティで語り継がれる年老いた盲目の賢者が登場する。その老女は「奴隷の娘で、黒人で、アメリカ人」であり、「掟であると同時にその掟を破る者」でもある(『記念講演』267)。その老女のもとに若者たちがやってきて、盲目であることにつけこんで、手に隠した鳥の生死について問うのだが、老女は曖昧に「それはあなたの手の中にある」としか答えない(268)。つまりその若者は手の中の鳥の生命に対して責任を持つ必要があり、力を行使する者はその力を示すための道具について責任を持たなければならないと言うのだ。モリスンは、鳥は言語のメタファーで、老女は作家だと言う。言語は「国家によって統制されたり検閲されたり」するため、「死にやすく抹消されやすく、確実に危険にさらされていて、意志の力によってしか救われることがない」(268)。統制され検閲された言語は「性差別主義者の言語、人種差別主義者の言語」、つまり「支配者の治安維持的な言語」であり、「何百万もの人びとの苦しみを沈黙させてしまうように計算された政治と歴史の言語」なのだ(268-269)。しかしそれでも、言語を使う者はその死の責任を負わなければならないとモリスンは言う。この死んでしまった言語に対して、責任をもって使われる言語は、「意味が存在するかもしれない場所に向かって放物線を描く」(270)。支配者の「言語は決して奴隷制や大虐殺や戦争に明確な定義を与えることはできない」からだ(270)。虐殺された人々が言葉で証言することはかなわず、支配者側の言語でそれを描いた「歴史」は完全なものとは言えない。被害者の歴史は語るべきことだけれども「語れない、語られな

かったこと」となる。モリスンはエッセイ「語れない、語られなかったこと」(“Un-speakable Things Unspoken” 以下「語れない」)で、アメリカ文学の中で語られることのなかったアフロ・アメリカンの存在を論じているが、このテーマはモリスンの全作品を貫くものと言える。しかしそれでもその存在を言語で表すしか選択肢がないなら、言語はむしろ「言葉を絶するものに近づこうとすること」のために力を発揮するものでなければならない(「記念講演」270)。これが「明確な定義」を与えない言語、放物線を描く言語、つまり権威的な言語の代替言語としての沈黙やハミングということになる。

『ラヴ』の語り手たちは、抑圧された者の立場から語る。支配者はコージーで、家族を諍いに巻き込んでいる。白人への密告者として同胞を売り財をなした父親を恥じ惜みながらも、コージーはその父の遺産で白人地域のホテルを買い取り、当局に賄賂を渡してビジネスの優遇を図り、成功を収める。またセレスチャルという愛人の他にも、Lやヴィーダとの関係も疑われる(Gallego 98)。コージーは幼児性愛者だった。5歳でコージーを見知り14歳で家の手伝いに駆り出されたLが幼児性愛の対象になったことは想像に難くない。また缶詰工場からホテルに抜擢されたヴィーダもおそらくコージーと関係があっただろう。ヴィーダはホテルの仕事に3枚もドレスを買ってもらったと回想している。頬に釣り針がささった幼い少女は、コージーの愛人として長く見え隠れした娼婦セレスチャルだろう。このような放埒な女性関係、しかも幼児性愛という歪な性癖をもったコージーは、9歳だったヒードに性的接触を行い、ついに結婚する。その結婚が家庭内に波風を立てた結果、孫娘を追い出し、愛情を見せる気配もない。クリスティンが回想する通り、母親メイはコージーのために「奴隷のように働いたのに無視されていた」(『ラヴ』99)し、ヒードは自分がコージーに200ドルで買われたことを知っていた。地元の黒人コミュニティには博愛主義者のように金銭的援助をするが、決してホテルには足を踏み入れさせない。このようにコージーが象徴しているのは単なる家父長制ではなく、いわば奴隷制時代のプランテーションの主人だろう。Humannは『ラヴ』の中心テーマは「ドメスティック・バイオレンスとその影響」(Humann 247)と指摘しているが、「ドメスティック」は家庭内のみならず、プランテーションという、より大きな家の範疇での奴隷に対する暴力ともとれるだろう。だから物語は主人コージーの視点で語られることは一度もなく、支配者側の言語は小説には見られないように綿密に構成されている。もしもこの小説がコージーの視点で書かれていたら、全く異なる家族の歴史になっていたと推測することができよう。モリスンがコージーに語らせなかった理由はここにある。

「記念講演」の老女は、結局若者たちに言語についての説明をすることはなく、沈黙を守る。この沈黙は「彼女が話した言葉の中に読み取れる意味よりも深く」、若者たちは「その場で思いついた言葉でその沈黙を満たす」のだ(「記念講演」271)。若者たち

は語り始める。奴隷制の恐怖にまでさかのぼって、語られることのなかった人生、すなわち歴史を語る。その話を聞き終わった老女は、若者たちがついに鳥を手に入れたと喜び、「なんてすてきなんでしょう、これは私たちが成し遂げたことなんですよ、一緒にね」と言う (273)。

語りには主観が介在し、「支配者の治安維持的な言語」を使って描くことはこれまでのアメリカ小説の中で多くの場合行われてきたことだ。しかし「記念講演」から言えることは、作家は事実を言語で明確に表すことはできないから、その表したい意味に向かって放物線を描くように語るのだということだ。『ラヴ』の語り手は言語による明確な描写を拒否する。事実はわかるようでわからない、曖昧な言葉で語られる。またときに沈黙やハミングが語りの代わりに聞こえてくる。この沈黙はアフロ・アメリカンの文化に深く根差すものだ (Denard 77)。「私たちの人生には前後関係がないのですか。ビタミン豊富な歌も、文学も、詩も、力強くスタートを切れるように手渡してくれる、経験に結びついた歴史もないのですか」と「記念講演」の老女は問うが(「記念講演」272)、モリスンの語り手は曖昧な言葉、ハミング、沈黙といった文化のバトンを読者に託しながら、アフロ・アメリカンの歴史や人生を描き直してもらえることに期待をかける。このリレーは語り手と読者の共同作業となるのだ。

2005年 Vintage 版の『ラヴ』には2003年の初版にはなかった序文が追加された。この序文でモリスンは語り手について書いている。『ジャズ』以降モリスンの語りは初期の作品と比べて大きく変化している。『ジャズ』ではコミュニティの一員に思われる姿の見えない存在、モリスンの言葉で言いかえれば「本そのものがナレーター」だったが、『ラヴ』では「形のある登場人物の声」を使って、登場人物の秘密の多い内なる声の語りを邪魔したかったと言っている。

秘密と部分的な観察だらけの登場人物の内なる語り声は、時間にも空間にも制限されない「私」、つまり生と死の境界線によって、邪魔され観察されることになる。だから「L」と呼ばれる人物には、建設的で破壊的な才能とともに、その名前が表す想像的で変容する性質を提示し象徴させたかった。(『ラヴ』 x-xi)

Roynon はこの Vintage 版の序文については批判的で、「作品の中に L の名前や重要性を示す手掛かりはたっぷりある」のに、なぜ本編を読む前にわずか数ページに収まる要約を読者に提示するのか、と疑問を呈している (Roynon 90)。確かに謎そのものよりも謎解きを優先し読者を導きすぎている感は否めないが、モリスンはそれほどまでに L の存在の重要性を強調したかったのだ。つまり『ラヴ』は「ラヴ」と名付けられた L の物語であり、また Wallace が指摘する通り、言語 (Language) の物語であるとも

言える (Wallace 380)。明確な定義に対抗する曖昧な言語、沈黙やハミングからなる放物線状の言語を、Lは体現しているのだ。Lの語りは、それぞれの人物の主観的な意識/歴史を俯瞰し、一冊の歴史書を校正するような役割を担う。これまでの「歴史」の記述法を破壊し、その中で言葉を与えられなかった人々の歴史を、新たに正しい「曖昧な」言語で描く。歴史を俯瞰するためには時間と空間を超越した存在でなければならない。これまで通常権威的な3人称の語り手が使ってきた「支配者の治安維持的な言語」を拒否する意図を持って、Lは沈黙を提示する。Lは沈黙の言語だ。「死んだ鳥」でも「明確な言語」でもない、沈黙やハミングという言語を使って伝えるのだ。その役割は「ラヴ」と名付けられたLが、愛をもって成し遂げるべきものなのである。

モリスンはさらに「愛は天候、裏切りは雷で、雷があるからこそ天候の存在がわかる」と続ける(『ラヴ』x)。コミュニティに対する裏切りや家族、友人への裏切りを描くことで、その背景にある愛という概念が描かれることになる。これは賢者の放物線が指し示すものだ。Lの名前は聖書中の「コリント人への第1の手紙」第13章のテーマだと小説の後半でようやくLは言う。この手紙のテーマが「愛」で、Lは直接「私の名はラヴ」とは言わず、放物線で語る。「手紙」には続いて「私たちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。全きものが来るときには、部分的なものはずたれる」(13:9, 10)とあるが、これまで書かれた「歴史」も含め、『ラヴ』の人物たちがそれぞれに意識の内で作ったものは歴史の一部でしかなく、全体を「愛」で俯瞰する者が現れたとき、その真偽が示される。「愛」を体現し、時間も生と死の境界線をも超越したLが、賢者としてその役割を担っていると言えよう。

『ラヴ』は「女たちの両脚は大きく広げられているので、私はハミングする」(『ラヴ』3)で始まる。「語れない」でモリスン自身が自作について述べている通り、モリスンは常に小説の冒頭の文にこだわり続けている。この作品でもやはり作品全体の理解のために冒頭文が重要なキーとなるだろう。ハミングは語りたけれども語る言葉を持たないときにLがすること、つまり語ることとほぼ同じ行為、沈黙ともほぼ同じ行為でもある。「女たちが大っぴらに脚を開く前は、秘密っていうものがあった。守るべき秘密とか、打ち明ける秘密が。今は、どう？ ないわ。あけっぴろげなのが今の風潮。だから私はハミングする」(3)とLは時代を嘆く。秘密とは、打ち明けたり漏らしたりすることによって、言葉が作り出すものでもある。女たちがすべてをさらけ出してしまったら、もう秘密はない。秘密がないということは言葉がないということ、つまり言語は死んでしまった、とLはハミングで示す。しかし死んでしまって必要もなくなった言語をただ無意識に使い、「頭の力を借りずに舌が勝手に動く」ような今の時代、アフロ・アメリカンは「寡黙が意味する重みの美しさを忘れてしまっている」(3)。沈黙はもともと、語るべきことがあるけれど秘密にしている、あるいは語るべきことが語れない、

という心情を内包している。Lは沈黙/ハミングの意味を、埋めてみよ、と「記念講演」の老女のように読者に挑んでいるのだ。

アフロ・アメリカンの文化に深く根差す沈黙については Denard が詳しく述べている。沈黙は文化の違いを表す比喩的表現として使われていると Denard はいう。口承の物語形式と同じく、沈黙は「知恵と抵抗のサインで、アフリカ系アメリカ人の文化では目立って表現力豊かな部分を占めている」(Denard 77)。Lの沈黙は言葉よりも重い、先祖から受け継いだ民族の知恵のサインだ。Harackによれば、Lは「口承文化の中にみられる共通の記憶」を体現しており、その語りは「歴史に対抗する語り」でもある(Harack 271-272)。またこの沈黙は時に「秘密の言語」で表されることもある。ヒードとクリスティンが言葉に困ったときに気持ちを通わせる「ヘイ、セレスチャル」や、大人から秘密を守るための“idagay”を語尾につける、俗に“Pig Latin”と呼ばれる言葉遊びも沈黙の表現といえる。お互いから引き離されたところから始まる2人の波乱万丈の経験は、決して世界史に残るようなものではなく個人的な体験だけれども、「奴隷船に積まれた囚われのアフリカ人の経験に匹敵する」ものであり(Wyatt 95)、「共通の記憶」を表すものでもある。奴隷船の中の人々、プランテーションで労働を強いられる人々の沈黙は、まさに「知恵と抵抗のサイン」であり、これは現代に生きる人々の過去とのつながり、つまり「人生の前後関係」を力強く示すものだろう。

II. Lの語り

明確さを拒否して放物線を成すLの言語とは曖昧な言葉や沈黙だが、では具体的にどのようなものか、例をいくつかあげてみたい。『ラブ』冒頭のLの語りに、寡黙な自分でも「必要なときには子宮もナイフも止められるくらい強い言葉だって言えた」(『ラブ』3)とある。Lは時間的な制約を受けない語り手であるため、読者はまず「前後関係」が分からず面食らう。それぞれの人物が行う過去の発掘を読み進めるに従って、読者にも徐々に詳細が分かってくる。まず第2章でヴィーダが回想するのが、1971年のコージーの葬儀の場面だ。コージー家の女たちは遺言書をめぐって喧嘩を始め、クリスティンがナイフを持ってヒードに襲いかかろうとしたとき、Lが仲裁に入りわずか2語の言葉で止める。その2語が「言うわよ」(“I’ll tell”)だったことは、第4章のクリスティンの回想でようやく明らかになるが、何を「言うわよ」かが明確に述べられることはない。漏らされたくない秘密は、コージーに起因する性的トラウマが招いた数々の耐え難い経験なのだろうが、最終章でそれぞれが回想するまでヒントもない。

Lは「前後関係」については必ず沈黙する。それはそれぞれの人物の語れない事柄だからであり、その秘密を暴露するのはLの仕事ではない。クリスティンとヒードは子

どものころ、二人にだけわかる符丁“idagay”を使って秘密を共有していたが、「たとえ idagay を使っても決して共有できない恥辱を二人とも抱えていた」ことが、最終章でわかる(190)。廃屋と化したホテルで屋根裏から転落し瀕死の重傷を負ったヒードと、長らく心臓を患っていたクリスティンは、死を目前にして和解に至る。皮肉なことだが、和解のきっかけは、“idagay”で秘密を共有できる友人を持たず、家庭でも社会でも暴力的に扱われてきたジュニアの、無邪気とも思える悪意だった。ヒードは回想する。9歳のヒードは、ホテルでコージーに呼び止められ水着姿の胸を触られる。そのことをクリスティンに話そうとしたが、クリスティンは嘔吐している。嘔吐の原因もコージーに触られたことすらも、ヒードは自分の中にある悪いもののせいだと自分を責める。一方のクリスティンも回想する。ヒードを探してホテルを見上げると、自分の子ども部屋でコージーが自慰をしている。クリスティンが嘔吐したのはこの光景だった。コージーが孫娘である自分を近親相関的な行為に巻き込んでいると感じ、祖父と自分を恥じ、ヒードの顔が見られなかったのだ。“idagay”でも分かち合えない恥辱は2人を自己否定に向かわせる。このような自己否定は、歴史的にアフロ・アメリカンについて回るものだった。民族が共有する過去の経験や、差別をないがしろにする法律が、アフロ・アメリカンのメンタリティを決定づけてしまっていたためだ。幼い2人が抱えた性的トラウマはその象徴であり、その後自己の存在を矮小化し、浮気や愛人関係、放蕩、墮胎など、秘密にしておきたい行為に誘うことになる。「言うわよ」と言われておじけづく要素は、2人にはありすぎた。その言われたくないことの1つが、「子宮を止めた」ことだった。1958年ヒードはホテルの客との浮気で妊娠し、流産する。それを認められずなおもおなかを大きくし続けているとき、Lが「目を覚ましなさい。あなたのオープンは冷えているのよ」(174)と言ったことを、物語の終盤第8章でヒードは回想する。

和解の場面でヒードは浮気については触れるが、回想に見られた詳細は、告白されない。同じく性的トラウマも回想されるのみで、互いへの告白には至らない。2人は「疲れきっていて、おそらく永遠の眠りに向かって漂いながら、罪の誕生については話さない。Idagay を使ってもどうしようもないから」(192)。秘密の符丁すらも役に立たないほどに言葉は死んでいる。しかしその言葉は最終章では一見すると誰の言葉かわからない。2人の会話には引用符がなく、死を前にして、2人の言語は明確な定義を排除し自他の区別をなくす。先祖の「共通の記憶」、連綿と続くアフロ・アメリカンの罪の意識と自己否定が、時間と空間を超えた場所で2人の言葉と溶け合う。2人は共同作業で歴史を書き直しているのだ。そこはLがいる場所でもある。この和解の直後、1人が先に亡くなる。多くの批評家がヒードが先に逝ってしまったと解釈しているし、実際そのように思われるのだが、実は語り手はどちらとも明言していない。モリスンが故意に隠している、という批評家もいる(Li 41)。このように2人の個人的な経験も生死も区別

なく認識され、さらに民族全体の記憶と重ね合わされるとき、Lの役割は完了する。2人の会話の場面には、Lの焼くシナモンパンの匂いが漂う。Schreiberも指摘しているように、Lがハミングしているのだ（Schreiber 155）。Lの「ハミングはみんなを励ます」し、「考えをまとめてあげられる」（『ラヴ』4）。Lの沈黙はその沈黙を聞く者に「前後関係」の構築を促すのだ。

放物線の語りの例をもう1つ挙げてみたい。冒頭でLは、ホテルの海に出没する「ポリスヘッド」なる怪物が、悪さをする者を海に引きずり込んでいくという言い伝えを紹介する。そのポリスヘッドは1942年子どもたちを飲み込んだ。また1958年には花嫁と浮気相手を飲み込み、この年からホテルの衰退が始まったとLは言う。この語りで唯一明確な数字1942年と1958年という年は物語のキーとなる。

1942年に溺れた子どもたちはヒードの兄弟で、その喪も明けないうちにヒードは200ドルでコージーに買われて結婚するが、この結婚はコージー家の人々に軋轢を呼ぶ。近隣のコミュニティの中でも目立って貧乏な家の子もだったヒードを妻にしたのは、コージーの性癖とともに罪悪感と復讐心のためだった。かつてコージーの父親は密告者として仲間を裏切り金を稼いでいた。父が差し出した男が自警団に連行されたとき、幼い少女が泣きながら後を追いかけて、馬の糞に躓いて転んでしまう。大勢の白人に混じって子どもだったコージーもその様子を笑いながら見ていた。この光景は、リンチを笑いながら見ている白人たちの記録写真を読者に思い起こさせるが、コージーにとっても同様だっただろう。ヒードとの結婚はこのときの償いと父親に対する復讐だった。愛情の欠けた結婚に幼いヒードも気づいていたが、ヒードの期待はただクリスティンと一緒に暮らせることにあった。しかしこの結婚でコージー家は外のアメリカ社会と同じ格差社会のミニチュアとなる。コージーの息子と結婚したメイは巡回牧師の娘で、その生活は主に漁師や缶詰工場で働く貧困層に依存していた。しかしホテルで働くメイは夫と子どもよりもコージーの欲望を満たすために奴隷のように働く一方、コージー家に属することで半ばブルジョア化していた。最下層出身のヒードを、ハエを追いかけるように扱うのだ。子育ては放棄したものの、娘のクリスティンを感じ、娘がヒードを邪魔者扱いしたときだけ母親らしく振舞う。クリスティンにとっては祖父の自慰行為とヒードの結婚がオーバーラップし、ヒードを求めながらも許すことができない。新婚旅行から帰って来たヒードが「結婚指輪を貸してあげる」と声をかけたとき、クリスティンは秘密の符丁で「あなたなんか奴隷よ」と侮辱する。後に高校を出たクリスティンは、教養のないヒードの文法間違いを指摘し笑いものにする。クリスティンの肌は明るめだが、ヒードの肌は漆黒だ。一つの中核の中に階層があり、同じ人種の中に格差がある。愛情の欠けた家では格差が広がり、女たちが求めたものはコージーの遺産とブルジョワジーだけだった。親友だった幼い2人に憎しみを植えつけたのが1942年だった。

1958年にポリスヘッドが飲み込んだのは花嫁とその浮気相手で、どうやらこの男はヒードが浮気をした男の兄だったようだ。海の事故で亡くなった兄の遺体を引き取りに来たという男を慰めるうち、「必要とされることと感謝されることの違いを知って」初めて満ち足りた日々を過ごした(172)。だが、約束したはずの駆け落ちもかなわず、おなかに子供だけが残ったが、それも流産してしまう。過去の性的トラウマのせいで自己否定してきたヒードは、妊娠によって「自分は変わっているけれど、孤独ではないし、大切な存在でもある。それを証明する必要なんか無い」と自己を肯定しようとした(173)。だから自己証明のために流産は認められなかったのだ。だが先に述べた通り、Lがヒードの目を覚まし「子宮を止めた」のだった。

このようにLは1942年と1958年の2つの年に「何かがあった」ということを示唆するに留まる。何があったかは、プランテーションたるコージー家で抑圧されていた者たちにそれぞれ語らせるのだ。ポリスヘッドは言語のメタファーとWallaceは言う。死んでしまった言語は「抑圧的なヒエラルキーのために使われるが、それはちょうどポリスヘッドの話が女こどもを抑えるために使われるのと同じ」だからだ(Wallace 383)。ヒエラルキーのための言語は人に有無を言わせない。しかしLの沈黙は人に語らせる。『ラヴ』の枠組みはLの沈黙だ。冒頭の語りは「女たちの両脚は大きく広げられているので、私はハミングする」の一文で始まり、小説の最後もLの語り「そしてハミングする」で終わる(『ラヴ』202)。このハミング/沈黙で囲まれた内容は、コージー家の人々の秘密であり、またコージー家が鏡のように映し出す社会の秘密、あるいはアフロ・アメリカンの「共通の記憶」である。つまりそれは弱者の声が語ることでできなかった歴史で、その書き直しを促すのがLの沈黙の役目なのだ。

1958年という年にはもう1つのしかけがある。女たちが争ったコージーの遺言書は、1958年のホテルのメニューの裏に走り書きされていた。Lが最後によく読者に明かした秘密は、この遺言書を捏造したのはLだったということだ。コージーの本物の遺言書は1964年に書かれ、全財産を愛人のセレスチャルに遺贈するというものだった。コージーの息子に頬に刺さった釣り針を取ってもらった少女が、幼いころのセレスチャルだろう。コージーは馬の糞に躓いて転んだ少女を笑ったことの贖罪としてヒードと結婚したが、セレスチャルもおそらくその贖罪の一部だったのだろう。自分と息子を同一視していたコージーは、セレスチャルを免罪符とし、遺産を残したのだ。Lがコージーの遺言書の内容を知ったのは1971年になってからのことだった。「7年間の自己憐憫と良心の呵責に見えたものは、実は復讐だったのだ」とLは気づく(201)。1958年のヒードの妊娠は浮気によるものとコージーは知っていたのだ。コージーとホテルのために奴隷のように働いた家族も、コージーにとってはホテルを衰退させた原因にすぎない。1960年代は各地で人種暴動が頻発し、コージーのリゾートにもその波が押し寄せてい

た。ブルジョアとなっていたコージーは黒人の裏切り者とみなされ、通りは罵声を浴びせる子どもたちの暴挙や放火事件であふれていた。メイはKKKよりも黒人運動家を恐れ、ホテルの権利書などを浜辺に埋めてしまうほどに狂ってしまった。保安官はホテルをたたむようにコージーを脅した。ホテル衰退の要因は時代だったのだが、コージーは「奴隷」のせいにしたのだ。しかし家族に何一つ残そうとしないのは正しいことではないとLは考え、遺言書の捏造に思い至る。Lが相続人に指定した“sweet Cosey child”は争いの種になる。1958年のメニューに走り書きした「コージーのかわいい子」であれば、ヒードが妊娠した子どもと受け取られるかもしれない。それを知らないクリスティンはコージーの血を引くのは唯一自分だけと言うだろう。妊娠を知られたくないヒードは、自分のことだと主張するはずだ。女たちは虎視眈々と相続人の権利を狙い、敵意をむき出しにしたまま同居を始める。だが逆にそれは「つながったままにいる理由を与えた」とLは思う(201)。2人で共に暮らしていればポリスヘッドが狙う自暴自棄な女やだらしのない子供にならずに済む。つまり家から無一文で放り出され、言語によって支配される弱者になってしまう危険から逃れられる。Lはこうして2人を守ろうとした。

しかしそれよりも大きな秘密は、その遺言書を使って家族を救うためにコージーを毒殺したことである。だがLの告白は曖昧だ。

解決方法は1つしかなかった。もし自分が何をしているかわかっているのなら、ジギタリスはすぐに効くし、そんなに長くは苦しめない。彼は考えることに向いてなかったし、81歳だからこれから良くなることもない。度胸がいることだったけど、葬儀屋がドアをノックするずっと前に、あの悪意あるものを破いたわ。私のメニューはうまくいった。2人がつながったままにいる理由を与えたし、たぶん言葉がどんなに大切かわかったと思うわ。もし言葉が適切に使われれば、自暴自棄な女たちや育て方を間違った聞き分けのない子どもたちを狙う、ポリスヘッドの注意をそらすことができる。難しいことだけど、それをした人を私は少なくとも1人知っている。その人はポリスヘッドのつば広の帽子と水の滴るひげの真下に立ち、追い払ったの、たった一言で——歌だったかしら？(201)

本物の遺言書を破り捨て偽物を使ったこととジギタリスを使った毒殺についての告白の仕方が大きく異なることに読者は気づく。コージー殺しがあまりにも曖昧な表現なのはなぜだろうか。コージーに対する愛情はLの語りに見え隠れしている。だがプランテーションの主人を愛し殺すことは、Lにとって最大の秘密だろう。『ラヴ』はこの点でモリスンの小説『ビラヴィド』(*Beloved* 1987)と対をなすものと言える。『ビラヴィド』の子殺しは『ラヴ』のコージー殺しとして繰り返される。『ビラヴィド』は、娘が奴隷

にされることを拒絶し、娘を愛するがゆえに殺してしまう母親の物語だ。一方Lはクリスティンとヒードを守るために愛する者を殺した。『ビラヴィド』のタイトルは「愛された者」を意味する娘の墓碑銘だが、『ラヴ』は愛するという行為をするLの名前であり、その行為自体を意味する、あるいは「愛せよ」と命令するタイトルでもある。Bouson と Harack が指摘するように、『ビラヴィド』の受動的な愛は『ラヴ』の能動的な愛へと引き継がれる。自己否定を繰り返す「共通の記憶」は「抑圧的な言語」によって作り出されたものだ。それに対抗する手段は沈黙の言語であり、その沈黙を聞く者をLは自己肯定へと導く。言葉で愛を明確に描くことは不可能だから、Lはコージーも2人の女たちのことも「愛」という言葉を使って語ることはない。自分の名前すら「ラヴ」だとは明言しない。Lの愛を描けるのは、曖昧な毒殺の告白と、偽の遺言書に書いた「コージーのかわいい子」という表現だけだった。

ポリスヘッドを追い払った女はセレスチャルだと Wallace は言う (Wallace 382)。セレスチャルはモリスンの小説にしばしば登場する孤高の女性の1人だ。『タールベイビー』(Tar Baby 1981)の卵を抱えた黄色いドレスの女性に代表される、セリフはないけれどもその堂々とした姿に登場人物たちが畏怖の念を抱くタイプの女性だ。セレスチャルは娼婦だが、「ハイ、セレスチャル」と冷やかしの声をかける男たちを無視し、決して俯かない。その沈黙と気高さは、抑圧的な言語としてのポリスヘッドの狩りの的にはならなかった。Lも同じく孤高の人だ。能動的に愛し、沈黙で人を誘導する賢者である。わずか一言「言うわよ」で人を動かし、憎みあう者たちをハミングで和解に導くのだ。

『ラヴ』の語り手Lは既存の抑圧的な言語に沈黙で対抗する賢者だった。さらにこの賢者は愛を体現する者でもあった。この愛はどこからくるものだろうか。Harack (271) と Bouson (360) はLを先祖的母亲たる人物と言っているが、私はマミーと言いたい。賢者の上からの視線ではなく、マミーの底辺から見上げる視点で語られる物語が、『ラヴ』の特徴ではないだろうか。賢者たる者が先祖的母亲ならばそこには権威が含まれる可能性があり、言葉の圧力も生じる恐れがある。しかしマミーは常に沈黙をもって抑圧に対抗する者の象徴となる。賢者とマミーという通常相いれないカテゴリーの融解は、明確な定義を拒否する語りを反映していると言えよう。

マミーは古くから様々な小説や映画に登場する。白人家庭で白人の子どもたちの乳母をしながら家事をこなす黒人女性で、自分の子どもよりも白人の子どもを優先し、愛情たっぷりに育てる姿が、アメリカ文化史の中で一般的に受け入れられている。マミーは子どもたちには厳しくマナーを教えたり、率直な物言いをしているようだが、白人家庭の全てを知らずながら家族の秘密は口外せず、家族を守るためでなければ意見も言わない。ブルジョア化したコージー家でLは幼い2人を守る。父親を亡くしたクリスティンを

ベッドに入れてやり、ヒードのために、おそらくメイの悪意により結婚式当日まで隠されていたウェディングドレスのサイズを調整する。クリスティンの卒業パーティで侮辱されたヒードを打ったコージーに「どんなことがあっても、二度とあの子に手を上げないでください。もし上げたら、私出ていきます」(『ラヴ』140)と言い、主人を諭す。幼いクリスティンとヒードを助け、大人になっていがみ合うふたりを仲裁する。このように全てを見聞きしながら何も語らずハミングするLは、まさに賢者たるマミーだ。「コージーのかわいい子」に対する口数の少ない言葉の威力は、放物線を描きながらあるべき姿へと2人を誘う。

小説全体の構成を見るとLの語りは何を隠し何を守ろうとしていたかわかる。Lの語りは小説の最初と最後にあり、ハミングで全体を囲みながら、コージー家の秘密を守る。また第4章と第6章の終わりでLは語るが、この2つの章ではクリスティンとヒードが過去を回想している。「コージーのかわいい子」を守るために、Lは語るのだ。またLはプランテーションの子どもたちの世話もする。ヒードとクリスティンの過去をなぞるような貧しく放埒な人物ジュニアにも死後のLは温かいまなざしを向ける。第3章のジュニアの回想の後にも、Lは語っている。ジュニアも、コージーの最初の妻も、セレスチャルも、すべてプランテーションの子として、Lはここで守るのだ。

おわりに

エッセイ「語れない」でも、モリスンは常に歴史をバックに語る。奴隷制はモリスンの中で永遠に忘れてはならない黒人のルーツの問題だ。この奴隷制という「共通の記憶」を、Lの語りはそれぞれの人物から、さらには読者からも引き出そうとする。小説ではそれをあえて不明瞭に、暗喩で描く。Lの語りは奴隷制の暗喩だ。先に述べたように、モリスンの小説は常に唐突な始まり方をするが、自作の冒頭文についてモリスンは「実際唐突で、しかも唐突に見えなければならない。その場所の情報提供者もいない。読者は捕まえられ、引っ張られ、まったくの見知らぬ環境に投げ込まれる」(「語れない」32)ようにしたかったと言っている。それは「ちょうど奴隷と同じように1つの場所から別の場所へ、どこにしようと別の場所へ、準備も防御もなく引っ立てられる」(32)体験を読者にさせたかったからだ。読者をこのような環境におくことは、決して文学的に行う復讐などではなく、賢者の務めであろう。賢者は沈黙し、読者は「記念講演」の若者のように、それを読みとり、考え、歴史/物語(history/story)を再構築する義務があるのだ。読者の色は関係ない。誰もが暗闇の中に置かれ、まるで盲目の老女のような状態で、賢者のように考えなければならない。歴史の語り手は常に歴史を動かした側から描くが、歴史から抹消された声は、沈黙のハミングの中から読者/現代人が読み取

るしかない。だがそれほど難しいことではないだろう。下から支えてくれるマミーの声が読者に「考えさせて」くれるからだ。コージー殺しと遺言書の謎ときはできたものの、小説には解決されない謎が山ほどある。最後の場面でコージーの墓にやってきたセレスチャルは死んでいるのか、社会の底辺で生きてきたジュニアはこれからどうなるのか、ローメンはジュニアを救えるのか、読後も読者は答えを見つけられない。オープンエンドはLの狙い通りだ。これは読者の協力で埋めなければならない沈黙であろう。

本稿の引用はすべて筆者の拙訳とする。

引用・参考文献

- Bouson, J. Brooks. "Uncovering 'the Beloved' in the Warring and Lawless Women in Toni Morrison's *Love*." *Midwest Quarterly*, 49. 4 (2008), pp. 358-373.
- Denard, Carolyn. "'Some to Hold, Some to Tell': Secrets and the Trope of Silence in *Love*." *Toni Morrison: Paradise, Love, A Mercy*. Lucille P. Fult ed. New York: Bloomsburg, 2013, pp. 77-91.
- Gallego, Mar. "*Love* and the Survival of the Black Community." *The Cambridge Companion to Toni Morrison*. Ed. Justine Tally. New York: Cambridge UP, 2007, pp. 92-100.
- Harack, Katrina. "'Not Even in the Language They Had Invented for Secrets': Trauma, Memory, and Re-Witnessing in Toni Morrison's *Love*." *The Mississippi Quarterly*, 66. 2 (2013), pp. 255-278.
- Humann, Heather Duerre. "Family and Violence in *Love*." *Women's Studies*. 43 (2014), pp. 246-262.
- Li, Stephnie. "Paradise Lost: Reconciling the Semiotic and Symbolic in Toni Morrison's *Love*." *Studies in the Literary Imagination*, 47. 1 (Spring 2014), pp. 27-47.
- Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Alfred A. Knopf, 1987.
- _____. *Love*. New York: Vintage Books, 2005.
- _____. "Nobel Lecture 1993." *Toni Morrison: Critical and Theoretical Approaches*. Ed. Nancy J. Peterson. Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1997, pp. 267-273.
- _____. *Tar Baby*. New York: Penguin, 1982.
- _____. "Unspeakable Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature." *Michigan Quarterly Review*. 28. 1 (1989), pp. 1-34.
- Roynon, Tessa. "Lobbying the Reader: Toni Morrison's recent forewords to her novels." *European Journal of American Culture*. 33. 2 (2014), pp. 85-96.
- Schreiber, Evelyn Jaffe. *Race, Trauma, and Home in the Novels of Toni Morrison*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2013.
- Wallace, Cynthia R. "L as Language: *Love* and Ethics." *African American Review*, 47. 2-3 (2014), pp. 375-390.
- Wyatt, Jean. *Love and Narrative Form in Toni Morrison's Later Novels*. Athens: U of Georgia P, 2017.